

わたしの読書術

奈良 敏行（笈の定有）

ミメーシス・ツインズという言葉がある。聞き慣れないが、模倣し合い共鳴し合う二人、という意味らしい。二人で考える人たちということだ。高校の頃から二十代の末まで、不思議とそんな友人に恵まれていた。

大学に進むと文学部ということもあり、共鳴の対象がいつそう狭く、昼夜を分かたず議論し続けていた。ある文学者や思想家を、互いに模倣し合うという、濃度の濃い交遊だった。

出会いはいつも双子のような観念の共鳴状態だった。そして核心を共有しながらも、互いの読書はだんだん枝分かれしていった。それでも基礎的な用語が一緒だったので、しばらく会わなくても、会えば実りのある会話にすぐに入れた。このツインズは幾組かにまたがっていた。しかしあくまでもツインズで、垣根を越えて混じり合うことはなかった。

時をおいて再開しても会話は途切れることはなかった。互いが加速度的に本を読み続けるわけだから、しばらく会わない間にそれぞれが発見した書物の情報交換はとても有意義だった。

なにを交換しあっていたのだろうか。もう五十年前のことだ。昔のようだが、時は止まったままだ。ヘミングウェイに『移動祝祭日』という小説がある。どこにいても、ある祝祭の日々がつきまとうという話だ。世界を解釈するということに、熱意を傾けていた。解釈するための概念（言葉）を、数多く手にするのが思考の筋力だった。一つの事態をどういう概念で解釈するかということが大事で、優れた著作者の存在は口から口へと伝わり、人々に影響を与えていった。

言葉や概念には「意味の裳裾」が広がる。正解とされる解釈はありきたりのもので、言葉自体が力となることは少ない。しかし、そこには明示されていない、言葉という形をとる前の律動が、自分で考えるところという路筋を開いている。未知の言葉、未知の概念と出合い、その意味の裳裾へと誘われて、数多くの書物へと分け入っていく。

三十歳を過ぎて生活圏を一新し、自分で本屋を始めるようになると、ミメーシス・ツインズという情念の友人は周囲にいなくなった。むしろ彼らを見捨てることによって本

屋になったということもできる。いまもときにそんな数人の面影が甦る。

本を読むという、限りのない追行から離脱し、本を売るという生活へと転身した。

本を売るということは楽しなかった。本を読んで模倣し合うという濃度はもうここにはなかったが、思いがけなくも、数多くの人たちの読書を模倣し、店頭に反映するという生活が新たに始まった。自分が購入した本の内容を話してくれる人も多かった。ここにはさらに広大な意味の裳裾があった。書物の主筋から離れ、こぼれ墜ちる感動も、本と読者の出会いの中にはあった。

本屋を始めることにより二十代の自分の読書の外部を知り、一人で読むことは自閉へ向かうことであつたが、売ることとは、世界そのものへ視野を開いてくれるという楽しさを識つた。

そうして四十三年が過ぎて本屋を閉じた。余命が短いと告げられ、周囲の医学書を読み漁ぎつた。意味の裳裾に分け入る読書への関心は失つた。

しかし半年を過ぎたが、変わることなく平穩に日常を繰り返していることに、気が付いた。

ふと気づくと人生最後のミメーシス・ツイنزが側にいた。わたしの二冊の著書を一緒に作ってくれた人だ。三十

歳も歳の離れた畏友だ。わたしは本屋であつた四十三年、あまり本屋の本は読んでいなかった。自分の日々の本屋作りにはしか目が行かなくて、周囲を振り返るゆとりはなかった。彼と出会つて、本屋が読むべきものとしての、本屋や人の存在をした。それは読者に届ける先を見据えての読書だつた。彼は『千年の読書』という書物を上梓した。「千年」とは、読書が時代を越えていつまでも続く、絶えることのない営みであるという宣言であつた。

時計の針を巻き戻すようにしてこの新しいツイنزの読書を追行し、時を遡つていった。

読書を積み重ねると少し見晴らしのいい場所へ出た。ここからは自分の二十代後半の姿も見晴らせた。書を捨てて本屋になつたのだが、捨てた書物を再び拾い上げるようになった。無為徒食に還つて行つた。

二十代は未来という途轍もない不安におしひがれて、読書という無為への集中にゆとりを与えてはくれなかつた。得体のしれない焦燥感がのしかかつていたのだ。それは書物の中からは本当の人生は始まらないという自明の真実を執拗に思いしらせるものであつた。

余命が尽きようとするこの頃、結局「いのち」の意味を知ることかなわず、それでもいいのではないかと思ひながら、途絶えることなく本を読んでいる。無為徒「読」

がわたしの読書の技法だろうか。若い頃ウォークマンというものがめずらしく、街路を移動しながら音楽を聴いていた。周囲が映画の書き割りのように見え、別の次元の中を歩んでいるようだった。いまは活字のウォークマンが耳に鳴っている。

言葉が概念が、意味の裳裾となり、現実がおぼろげになる。

2025.07.20

ヘミングウェイ 『移動祝祭日』 新潮文庫 2009

三砂慶明 『千年の読書』 誠文堂新光社 2022